

特集ワイド

△午前中に入り江の宿を出て、岬の突端に向かっていている。(中略) 東京から電車で二時間、九時ごろに着いた宿の表はすでに閉じていた――▽

川上弘美さんの小説「真鶴」は題名の通り、神奈川県真鶴町が舞台だ。相模湾に面した半島の急な斜面に坂道がめぐらされ、深い森も広がる。7400人ほどが暮らす港町だ。一人の女性が現世と幻の間を歩き来する幻想的な作品の舞台に、近くの観光地の熱海や箱根は似合わない。

花谷寿人の

体温計



その真鶴が昨年度、神奈川県内で初めて過疎地域に指定された。

◇

「海と触れる場所」「ふさわしい色」「自然な材料」「豊かな植

美の基準が守るもの

生……。抽象的だが、これらを含む69のキーワードが真鶴町の「美の基準」だ。1994年、町が施行した「まちづくり条例」に基づき建築物の目安である。建築物の高さや色を細かく制限

する基準ではない。たとえば「ふさわしい色」は住民、事業者と町が話し合って決めていく。

バブル期、高層マンション建設の動きがあったが、反対する町長

が就任し、開発をやめた。ではどんな町を目指すのか。つくられたのが、真鶴らしい美しさを守るための「美の基準」だった。

長年、まちづくりを担当する役場の下部直也さん(45)は「変わらない風景に価値が出てきた。その中で、幸せを求めて移住してくる若い人が増えている。地元の人も町の価値を感じるようになってきた」と言う。

人口減少に悩む自治体は多い。もちろん、人口が減らないに越したことはない。だが、それだけで地域の価値は測れない。美の基準の一つに「静かな背戸」がある。家々をつなぐ細い裏道を背戸道と呼ぶ。静かな背戸道を散策すれば木々の間から時折、青い海が見える。この風景が住民の誇りだ。

◇

小説「真鶴」に祭りの夜の場面がある。海へ出た「囃子船」に花火の火が降り注ぐ。

△火花はやがて小さな炎となつて、鬼火のように船のまわりをとびかいはじめる――▽

日本三大船祭りの一つ「貴船まつり」を題材にしたのだろう。美しさが立ちのぼる小説の舞台は、やはり真鶴でなければならなかった。

まつりは、あすから始まる。
(論説委員)